（公財）中央果実協会
No.072

米国産リンゴ　2023-24年度シーズンの振り返り

FreshPlaza　2024年5月17日

米国リンゴ協会は今週、2023/24年度の総括会議を開催し、推定収穫量や輸出等に関する検討を行った。ここでは、米国リンゴ協会の業界分析担当ディレクターであるクリストファー・ガーラック氏が座長を務めたセッションの要旨を紹介する。（1エーカー＝約0.4ヘクタール。米国リンゴ協会のレポートでは 1ブッシェル＝約19kg）

最新の生産状況

農務省の作物生産レポートは毎年8月に公表され、米国内のリンゴ産地上位7州の推定値が含まれている。前回の推定値は合計2億3,600万ブッシェルで、その後、米国リンゴ協会の会員による年次見通し会議で2億4,200万ブッシェルに修正された。

今月、農務省の非柑橘類果実とナッツ類の報告書が公表され、米国の合計生産量は2億7千万ブッシェルと推定されることが示された。いくつかの州の改訂推定値が示され、ワシントン州が1億8,100万ブッシェル、ミシガン州（2016年以来初めてニューヨーク州を上回った）3,200万ブッシェル、ニューヨーク州3千万ブッシェル、ペンシルベニア州1,300万ブッシェル、カリフォルニア州600万ブッシェル、バージニア州500万ブッシェル、オレゴン州400万ブッシェルであった。

しかし、2022年の農業センサスの栽培面積の合計に基づくと、農務省が2007年から追跡を中止した「その他の州」の2,100万ブッシェルがあることになる。これは、ウェストバージニア州、オハイオ州、ノースカロライナ州等の「その他の州」の生産量に光を当てるものである。

センサスによると、主要な州であるニューヨーク州とワシントン州がそれぞれ1万2千エーカー及び9千エーカー以上追加されるほか、ウィスコンシン州とノースカロライナ州もかなりの追加面積がある。米国全体では約3万3千エーカーのリンゴ栽培面積が追加され、2022年センサスでは2017年に比べて10%増加した。一方、カリフォルニア州とウェストバージニア州では、それぞれ2万5千エーカー及び1千エーカー減少した。

米国ではリンゴの生産量の規模に敏感な見方もあるが、ガーラック氏は全体像が重要だとして、「数えないからと言ってそれらのリンゴが無くなるわけではない。これらのますます増加する追跡されない州の動向を理解しておくことは、長期的な計画立案のための情報に基づいた業界の意思決定を助ける上で非常に重要である」と語った。

農務省の報告書によると、米国のリンゴ生産量は2014年の2億8,200万ブッシェルがピークで、今年の推定値は2億7千万ブッシェルである。しかし、2017年の生産量には2023年よりも多くの州が含まれているため、公平でない。同氏は、それらの州を加えると、今年が米国の生産量が最大の年であると指摘する。

農場の規模

センサスでは、農場の規模の拡大も指摘されている。同氏は「1～49エーカーの小規模農場は、過去20年間で減少した。50～179エーカーの中規模農場も同様で、この期間に33%減少した。大規模農場が少しずつ増えている」言い、小規模農場が大規模農場に統合されているものと推測されると付け加えた。同氏はさらに、「特大の農場も減少しているが、特大農場のうち2千エーカーを超えるものは着実に増加しており、20年間で42%増加した」と述べた。

生産費

センサスはまた生産費について、過去10年間で農業全体では費用が29%増加したのに対し、果樹・ナッツ類栽培では49%増加し、主に人件費と肥料コストの増加に牽引されたと報告している。ガーラック氏は、「2022年の全費用に占める人件費の割合は全農場では12%であったのに対し、果樹・ナッツ類農場では40%を占めた。そのため、コンバインで収穫される他の商品作物よりも間違いなく労働集約的である」と言う。

一方、報告書は、果樹・ナッツ類農場の純利益が2017年から2022年の間に64億ドルから58億ドルに9%減少したことを示している。逆に、全農場の純利益は、この10年間で64%増加した。

リンゴの出荷動向

今月の報告書によると、生鮮消費用と加工用の動きに一部変化がある。ペンシルベニア州では生鮮リンゴの販売が増えており、ニューヨーク州も同様である。特にバージニア州では生鮮リンゴの販売が前年比10%増加した。オレゴン州でもまた、生鮮用の出荷が約10%増加した。

品種別出荷量では、これまでにハニークリスプは83%増の1,100万ブッシェル、レッドデリシャスは1,200万ブッシェル（前年比約30%増）で、コズミッククリスプは61%増加した。5月時点の合計在庫量は、昨年の同時期に比べて33%多い。

生鮮リンゴは大部分が10月から5月にかけて出荷されるが、好調な荷動きの鍵は8月と9月にある。ガーラック氏は「8月、9月とシーズン序盤はかなり良かったが、まだ足りない。過去最高を記録した2014年のシーズンに比べて、シーズン序盤の出荷が400万ブッシェル足りなかった。これまでのところ、業界の出荷量は約1,400万ブッシェル遅れている」と述べつつ、4月までの時点で昨年に比べれば19%多いと付け加えた。

動きが鈍化しているのは、加工用のリンゴ部門である。同氏は、「それは、昨年が非常に好調な年だったことと大いに関係がある。加工業者達は貯蔵庫を満杯にしており、今シーズンの初めには加工用の売り先が本当になかった」と言う。

大所のワシントン州を含む複数の地域が豊作であることは別として、リンゴの在庫がまだこれほど多い理由は他にもある。同氏は、「特にハニークリスプやコズミッククリスプなどの多収性品種で、新植した園地からの出荷が始まっている。そのため、現在ある園地の生産性が向上している。また、果実の品質と保存方法も向上しているため、出荷可能量も増えている」と言う。

輸出入

一方、輸出については、米ドル高により、輸出はより高価になり、輸入は相対的に安価になっている。ガーラック氏は、「2014年から2015年にかけての豊作以来、輸入品を国産リンゴに置き換えるという大仕事を行ってきた。その豊作シーズンの後、輸入業者らは輸入を断つことができた。輸入を巡る状況は今や大いに難しい状況になっているため、それ（輸入を断つこと）はもう起こらない。」と言う。例えば、2014-15年度の国内の大豊作の前、2014年の生鮮リンゴの輸入量は990万ブッシェルであった。2023-24年度の生鮮リンゴの輸入量は520万ブッシェルで、この10年間で48%減少した。

また、内需の減少も対処すべき問題であり、業界は引き続き調査を続ける。

輸出については、今年のリンゴの輸出量は昨年を大幅に上回り、これまでに1,100万ブッシェル増加した。ガーラック氏は「輸出は10年前ほど多くない」と言い、貿易政策、ドル高、輸送コストの上昇等がすべて要因になっていると指摘しつつ、「理由が何であれ、以前ほど多くのリンゴを海外に出荷していない」と述べた。

同氏は、市場の違いについて、メキシコへの出荷が年初来48%増加したのに対し、カナダは減少していると指摘し、「インドはシーズンの初めに報復関税が撤廃されて以来、ものすごい勢いで戻ってきている。昨年のこの時点の3万1千ブッシェルに対し、今年はすでに170万ブッシェルに達している」と述べた。

価格とコストの動向

残念ながら、リンゴの価格はデフレ状態にある。「今シーズンに向けてリンゴの生産コストは34%上昇したが、価格は収穫以降に11%下落し、多くの生産者が赤字で販売している。こうした傾向は持続可能ではなく、特に労働面で何か手を打たなければ、こうした多世代にわたって経営されてきた農場の多くが手を引くことになるだろう」とガーラック氏は言う。

今後の展望

2024-25年度の収穫を見据えると、霜に関して大きな問題はなく、力強い開花が報告されている。ガーラック氏は、「改植は続いているが、生産が始まる新植園地はそれほど多くない。市場の状況を考えると、2年後の引き渡しに向けた今年の苗木の注文は多少減少する可能性がある」と言う。

執筆者: アストリッド・ヴァン・デン・ブローク